凌廷輝編『人生地理学』に関する一考察

高橋 強

1. はじめに
2. 凌廷輝編『人生地理学』出版の背景
   2-1. 「序付」
   2-2. 「総論」
3. 凌廷輝編『人生地理学』の内容概観
   3-1. 『最新人生地理学』との比較
   3-2. 「浙江潮」『江蘇師範講義・地理』との関係
4. むすびに

1. はじめに

2007年10月「多文化と世界の調和」池田大作思想国際学術シンポジウムにて、アモイ大学の黄順力教授が「『江蘇師範講義・地理』と『人生地理学』の比較研究」と題し研究発表を行った。この時、1909年『人生地理学』（凌廷輝編）の実物の存在が再確認された。

『人生地理学』は1903年に牧口常三郎によって著された書籍であるが、新鮮な書名の故に、また1000余ページにもわたる大著の故に、出版されるやいなや大きな注目を集めた。それは日本人ばかりでなく、当時日本に留学して
いた中国人学生からも注目を集めた。今日、中国の研究者によって、牧口著の『人生地理学』が中国人留学生によって中国語に翻訳されて、しかも四種類出版されていたことが明らかになっている。

一種類目は、1903年発刊の月刊誌「浙江潮」（第9期）（第10期）である。これは『人生地理学』の「植物」「海洋」の部分訳で印刷は日本である。中国の多くの地で販売された。二種類目は、1906年出版の『江蘇師範講義・地理』である。牧口は1904年から1907年にかけて、嘉納治五郎が創設した中国人留学生のための弘文学院（1902年－1909年）で人生地理学を講義していた。同書は牧口の講義を受けた江蘇師範学生が受講記録を編集して出版したもので、印刷はやはり日です。江蘇省の多くの師範学堂で教科書として使用された。三種類目は、1907年出版の『最新人生地理学』である。世界語言文字研究会編集部により翻訳された全訳の学術書である（挿絵、添付の地図も全く同じである）。印刷は日本で、中国各地の大書房で販売された。同書は大変に好評を博し、出版同年に再版（初版は7月、再版は10月）が出版されている。

四種類目は、1909年出版の凌延輝編『人生地理学』である。同書の存在は、一人の中国人研究者（郭双林『西潮激蕩下的晚清地理学』北京大学出版社2000年）によって確認されたが、その後しばらく実物の存在が不明であった。1909年出版の『人生地理学』は、その2年前に全訳本が出版されているだけに、大変に興味がもたれて来た。全訳本を基に、その後の留学生また研究者が、人生地理学をどのようにとらえ、どのように発展させていったのかを考察するのに、一つの資料を与えてくれるからである。

本稿においては、凌延輝編『人生地理学』の出版の背景を分析し、その他の三種類の中国語訳『人生地理学』との関連を検討しながら本書の内容を概観し、四種類の中国語訳『人生地理学』の中での位置づけについて考察を試みる。
2．凌延輝編『人生地理学』出版の背景

2-1. 「奥付」

「奥付」には次のような記載がある。

宣統元年四月初版印行
定価大洋三角半
編集者 廢安凌延輝 寧波日昇街
発行者 新学会社 寧波江北岸
印刷所 鈎和印刷公司 北京琉璃廠漢口黃陂街
発行所 新学会社 広東双門底
分発行所 新学会社 上海棋盤街
総発行所 新学会社

宣統元年とは1909年のことで、本書は1909年4月に凌延輝により編集され、新学会社によって発行されたことが分かる。

編者の凌延輝についてはその詳細は不明であるが、現在判明しているのは以下の内容である。浙江省廃安（旧名、現在の地名は異興）出身で、日本に留学し1903年に弘文学院を卒業している。留学中には浙江出身者を中心として組織された浙江同郷会の会員として活動した。同会は1903年1月より月刊誌「浙江潮」（全部で12期発刊）を発刊している。同誌の特色は、一つは、帝国主義的侵略やそれに起因する重大な危機についての文章が多いということ、二つ目は、民族主義を提唱し清朝打倒を呼びかけているということ、三つ目は、進歩的な科学文化的学説を多く紹介しているということである。特筆すべきは、同誌において牧口常三郎著『人生地理学』（1903年10月）の部分訳が掲載されたことである。「浙江潮」第9期（1903年11月）に「植物
第2章 『総論』

本書は合計82頁におよんでおり、本書編集の目的について述べた「総論」が目次の次に置かれているので紹介する。
人生地理学は、地理と人生の関係を研究する学科である。古より地理を語る者は、ただ幾つかの地名や言葉を覚え、あるいは古書を参考にし、その歴史を考証し、その現状を推測するだけで、これはただその表面の現象を考証するだけで、その中の真実の原理が分かっていない。従って、その原理を深く理解したいならば、地理と人生の関係を必ず理解しなければならず、その上多少なりとも発見があったなら、過去の観点に決して拘泥してはならず、空論を交わしたり、また実用を求めないことがあってはならない。人類がこの地球上に生存して、このように生存競争をしているが、大地と結局は如何なる関係を持っているのであろうか。私はただ大地の一部分を占めているにすぎなく、閉関自守（関所を閉じて外界との往来を絶つこと）が出来ない以上、その他の所と必ず各種の関係を持つべきで、関係を持てば、気候、物産、地勢、宗教、社会、交通および国家興亡の変遷の原則を比較することが出来る。人類発展の緩慢現象は、一つ一つの詳細な比較がなければ、決してその重要性を認識できない観点である。従って、地理学という学科は、表面から見るとただ普通の学科の中の一つであるが、実際には関係する範囲は広く、多くの学科を密接な関係を持っている。今日の人々の分類法に従うと、地理学は天文地理、地文地理、人文地理に分けることが出来、また人文地理を政治地理、経済地理等に分けることが出来る。従って、地理学はただ一つの学科に属するにもかかわらず、もしそ他の各種学科の知識を深く理解せず、その上演繹と帰納を加えなければ、地理学を本当に理解することは出来ない。ゆえに、もし地理学の思想や知識を拡充したいと思うならば、地理と人生の相互関係を研究する必要があり、どうして安閑としていようか。

地理と人生の関係は、このように偉大なので、それを研究しようと思うと、どこから研究を開始すればいいのだろうか。理想は実践の母で、理想の豊かな人は、必ず実践に助けを求めるもので、所謂実践というのは、反復した考察と推測を必要とするが、これは各種の学問の共通点であるが、地理学
はさらにそうである。守株待兔（偏狭な経験にしがみつきそれぞれの状況に応じて融通をきかせない）の人は、足跡を百里から出ず、古人の経験に固執し、誤った情報を用いる。某山、某水、某都、某村は、陳腐で全然新味がなく、広くたくさんの書を読んだと思っていても、実際は間違った情報が伝播されているのである。一旦門を出て道を歩き、道に迷わなくて帰って来て、しかる後初めて世界の知識が分かり、実地での視察でなければ、理解することが出来ない。欧米の探検家は、よく一人で万里を行き、山を登り川を渡り、苦労して旅をし、死んでも後悔しないようだが、結局は何のためであろうか。目的は、地理を視察し認識するためである。また古を好む人は、自由に考えを巡らせて、遠い昔の前に有機体はあったのか、人類はいつ出現したのか、社会はいつから形成され始めたのかを探求している。魂は天国にある或いは地獄にあるという言い方は、実に不可思議である。一体、何が原因なのであろうか。これらは、地理をしっかり学習する必要があるが、地理の人類に対する利点は遙かにこれからに限定されていない。

地球上の種族間の競争は、優勝劣汰（優れた者が勝ち、劣った者が淘汰される）、弱肉強食で、今日世界の所謂民族帝国主義は、その目的はどこにあるのか。それは勢力範囲の拡張にほかならない。勢力範囲を拡充出来るか否かは、その鍵は世界観念があるかないかである。世界観念があるかないかの鍵は、豊かな地理知識があるかないかである。従って、今日所謂強国は、彼らの普通の民は、豊富な地理知識を必ず持っている。所謂弱国は、彼らの普通の民は、地理知識が欠乏しているはずである。ああ、我が中華の大地よ、山河の美しさよ、天下に名が聞こえているが、どうして我が大地において帝国主義者にほしいままにさせておこうか。その上、我々が依存している土地は、祖先が遺してくれたもので、それを利用するのは、我々子孫が当然行うべきことである。欧米列強の狡猾な陰謀に勝ちたいと思うならば、民衆の眠りを覚ますことだ。地理を理解しないで、何に頼るのか。我が国国民の国家
についての思想を向上させたいと思うならば、もちろん我が国国民の地理知識を向上させる必要があり、これは地理学の人類に対する有益な最も主要な一面である。もし細部から述べると、さらに計り難くなり、一人で居ると、容易に心を閉じ込めてしまう。従って、気分転換をしよう。我々の美観を最もよく転換してくれるものは、山河の明媚と草花が美しさを競う情景で、のびのびと心地よくさせ、心を輝かせ目を楽しませる。高きに登り遠くを望む、まさに文人や学士が心を和ませているのではないか。古人は次のように言った。大地は我が文章を書くのを任せたが、これは道理である。これは地理学は人生に有益であって、人々の審美と興味を引き起こすことが出来るということである。ただ地理という学科であれば、各種の予測を検証するに足り、古代の歴史を考証するに足り、列強の陰謀を伺い知るに足り、愛国精神を振るい起こすに足り、美術への興味を強くするに足るのである。これ以外に、その他の利点は多くを論述しない。従って、地理を研究するには、即ち地理と人生の関係を研究することが必要で、どうして安閑としていれようか。

編者は「総論」の中で、“地理と人生の関係を理解すること”を強調している。そしてその目的として二点あげている。一つは、“真実の原理”を知るためである。この原理を理解できれば、生存競争を繰り返している人間と大地の関係を理解することに繋がり、人間発展の緩慢現象理解にも繋がる。そのためには世界との例えば気候、宗教、社会、交通、国家興亡等の比較研究が必要であり、また実地での視察も必要である。

もう一つは、世界観念を国民の中に構築するためである。但し世界観念があるかないかの鍵は、豊かな地理知識があるかないかであるので、国民の地理知識向上を強く訴えている。強国の国民に比べて、弱国中国の国民の地理知識欠乏の現状に憂いている。帝国主義の蹂躙に喘いでいる祖国に対する憂
いである。民衆の眠りを覚ますためにも、また民衆の国家に対する意識を向上させるためにも、地理を理解させようと主張している。

ただ地理学であれば、“各種の予測を検証するに足り、歴史を考証するに足り、列強の陰謀を察知するに足り、愛国精神を振るい起こすに足り、美術への興味を強くするに足るものである”という部分には、“人生地理学”に対する高い評価と、大きな期待が現れている。“人生地理学”を、一種の中国を救済する啓蒙の学問と捉えているようにも思える。

3. 凌廷輝編『人生地理学』の内容概観

3-1. 『最新人生地理学』との比較

『人生地理学』の目次は以下の通りである。

総論

第1章 日月及星
第2章 地球之成立
第3章 地形
第4章 地面諸帯（本文中では地面諸線）
第5章 五帯
第6章 地勢
第7章 五洲
第8章 島嶼
第9章 半島
第10章 地峡
第11章 山嶽
第12章 火山
第13章 平原
第14章 高原
第15章 砂漠
第16章 江河
第17章 湖
第18章 海
第19章 洋
第20章 潮汐
第21章 波浪
第22章 洋流
第23章 風
第24章 雨
第25章 気候
第26章 有生物
第27章 無生物
第28章 人口
第29章 人種
第30章 性情
第31章 社会
第32章 言語
第33章 文字
第34章 宗教
第35章 国家
第36章 交通

『最新人生地理学』の目次は以下の通りである。
緒論
第1章 地人関係之概観
第2章 為觀察基點之鄉土
第3章 観察周圍之方法如何
第4章 日月及星
第5章 地球
第6章 島嶼
第7章 半島及岬角
第8章 地峡
第9章 山嶽及谷谷
第10章 平原
第11章 河川
第12章 湖沼
第13章 海洋
第14章 内海及海峽
第15章 港湾
第16章 海岸
第17章 無生物
第18章 大気
第19章 気候
第20章 植物
第21章 動物
第22章 人類
第23章 社会
第24章 社会之分業生活地論
第25章 産業地論（上）
第26章 産業地論（中）
第27章 産業地論（下）
第28章 国家地論
第29章 都会及村落地論
第30章 生存競争地論
第31章 文明地論
第32章 地理学之研究法
第33章 地理学意義及範圍
第34章 地理学可得豫期之效果

両者の目次を比較すると次のように概観できる。
前者は、後者の「緒論」と第1章「地人関係之概観」から第3章「観察周囲之方法如何」を省き、第1章「日月及星」から開始し、第2章「地球之成立」から第7章「五洲」を除くと、第22章「洋流」までは、目次の順序は後者のそれとほぼ同じである。前後の第23章「風」以降は、前者は後者を模範とするが、第23章「風」、第24章「雨」、第25章「気候」を連続させ一まとめにし、第26章「有生物」、第27章「無生物」を続けて一まとめにし、後者の第22章「人類」を第28章「人口」と第29章「人種」と第30章「性情」とに分け、また後者の第24章「社會之分業生活地論」を第31章「社会」と第32章「言語」と第33章「文字」と第34章「宗教」とに分けている。前者はまた、後者の第25章「産業地論（上）」以降は、「交通」と「国家」だけを取り上げて、それ以外は省いている。
次に前者の視点から、後者の内容との比較を試みる。
前者の第2章「地球之成立」から第7章「五洲」までの内容を詳細に見ていくと、前後の第3章「地形」と第4章「地面諸線」と第5章「五帯」は、後者の第5章「地球」の第1節「地球之形状與人生」と第2節「地球之面積
第8章「島嶼」：島嶼と人生の特殊な関係について、後者の第6章「島嶼」を参照し要約をしている。その上で、新たにアジア、北南米、欧州、オーストラリア、アフリカの島嶼に分けて、それぞれ詳細に言及している。また新に中国に関する記述も見られる。「杭州湾の南に舟山群島があり、縦州海峡の南に海南島がある」と。

第9章「半島」：文明の発祥の起点は、半島にあるとの視点は後者の第7章「半島及岬角」を参照している。その上で新たに、半島の働きの動向に言及している。

第10章「地峡」： 「地頸」という名称を用い、スエズ運河やパナマ運河を取り上げながら、後者の第8章「地峡」を参照している。

第11章「山嶽」：山の各種の名称紹介や、山嶽と人生の関係については、後者の第9章「山嶽及谿谷」を参照している。その上で新たに、アジア、欧州、アフリカ、北南米、オーストラリアに分けて、それぞれを詳細に言及している。

第12章「火山」：火山の名称、例えば活火山、休火山、死火山や、また火山と宗教や迷信との関係は、後者の第9章「山嶽及谿谷」にはその記載がない。後者以外の資料を参照したものと考えられる。なお火山と宗教との関係にまで言及しているのは、編者が本書のテーマ「地理と人生との関係」の影響を受けて、新たに展開したものと考えられる。なお迷信として紹介している内容は興味深い。即ち、伊豆半島の火山の横穴は、仁明文徳天皇の時、火山の従五等の爵を以って封ぜられ、また進んで正五位になった、と言うものである。

第13章「平原」：平原と人生の関係については、後者の第10章「平原」を参照している。その上で新たに、中国、欧州、北南米に言及している。
第14章「高原」： 高原の定義や高原の人民と平原の人民の関係については、後者の第10章第3節「高原と人生」を参照している。その上で新たに、高原とは大河流の源であるといった視点を付け加え、アジア、欧州、北南米、アフリカにも言及している。

第15章「砂漠」： 砂漠の定義や砂漠と文明発生地との関係、また科学の発明による砂漠の利用等について、後者の第10章第3節「高原と人生」を参照している。

ならゆえに、「高原」と「砂漠」とを単独で言及したのか、今後の検討課題である。

第16章「江河」： 後者の第11章第1節「概観」、第4節「河之方向与人生」、第5節「河之部分与人生」、上流、中流、下流を参照している。なお最後に、陸路交通と河川交通をと比較しているが興味深い。即ち「百年来自動車が盛んになり、陸路交通時代になった。しかし河川交通を語らないというわけではない。自動車による貨物輸送は迅速で便利であるが、河川による貨物輸送は、そのコストは三分の一も及ばない。その上小さな蒸気船は、貨物船六七つを引く。大きなもの（蒸気船）になると、それだけに止まらない。引くものが多ければ多いほど、積載も重くなる。自動車の長所は早いというだけである。比較すると、今日交通に果たす河川の役割は有益である」と。後者においては、河川交通や蒸気船といった記述はある。当時、中国における自動車の普及状況は如何なるものであったのかよくわからないが、編者の時代考察はなり鋭敏である。

第17章「湖」： 後者の第12章「湖沼」の第1節「湖之特質與人」、第2節「湖沼之成因及所在與人」、第3節「湖與人之物質的方面」、第4節「湖沼與人生之精神的方面」を参照している。なお後者には中国の湖沼についての記述はないが、前者においてはその紹介がある。即ち「中国本土の洞庭湖・鄱陽湖・洪澤湖・太湖・昆明湖・新疆の雲布泊・チベットの贛格里海・青海の
青海はみな巨大である」と。やはり中国人の読者を考慮したものである。

第18章「海」： 後者の第13章「海洋」の第3節「開明人與海洋」、第4節「海国與島国」を参照しているが、特に海上権についての記述が多く、また地中海、欧州各国のそれに関する記述が詳細である。本書は全般的に欧州に関する記述が多いし、その上詳細である。

第19章「洋」： 後者の第13章「海洋」の第5節「海流與人生」、第6節「海洋與気候」を参照しているが、太平洋、大西洋、インド洋、北冰洋、南冰洋を詳細に解説している。やや教科書的な側面を感じる。なお「大西洋時代から南太平洋時代に進み、もし南太平洋時代から北太平洋時代に進んだとするならば、それはこの十余年間の事であろう」と述べ、その理由として日清戦争、日露戦争での日本の勝利や西洋列強の北太平洋における勢力拡大を取り上げているが、編者の当時の中国をめぐる国際関係への懸念が十分に表れている。最後の一文がそれを物語っている。即ち「北太平洋即ち中国全土は、実際は列強の注視の的となっている。変遷の速度は考えも及ばなかった。今後この問題は、如何に解釈すればよいかわからない」と。

第20章「潮汐」： 後者の第13章の第9節「波浪及潮汐與人生」を参照している。ここでもまず「潮汐」の定義から始まる。これは全般的にそうで、やはり教科書的なまた辞典的な機能も考慮していたのではなかろうか。

第21章「波浪」： 後者の第13章の第9節「波浪及潮汐與人生」を参照している。ここでもまず「波浪」の定義から始まる。

第22章「洋流」： 後者の第13章の第5節「海流與人生」を参照している。

第23章「風」： 後者の第18章「大気」の第4節「空気」、第19章「気候」の第3節「気温之分布」、第6節「風之種類與人生」を参照している。

第24章「雨」： 後者の第19章「気候」の第7節「湿氣與人生」、第8節「雲與人生」、第9節「雨與人生」を参照しているが、特に「五帶」熱帯、南北温帯、南北寒帯において説明がなされている点に特色がある。このことは
全般的になされている。

第25章「気候」 後者の第19章「気候」の第1節「気候と人生」、第2節「気温と人生」、第3節「気温分布」を参照しているが、特に文明と「五帯」の関係に言及した点に特色がある。即ち「一国の文明は、教育や政治に依存する。しかし教育・政治の発達は、温帯の地に限られている。何ゆえであろうか。寒帯の二帯の人民は、奮起の仕方を知らないからである。(略) 寒帯の人のその精神・その思想・その体格は温帯に劣る。温帯の人人は天然の束縛を受けない」と。なおこの論調は、後者の第30章「生存競争地論」の第4節「生存競争の適度地帯」の影響を受けている。即ち「温帯地帯は他の帯（寒帯帯）の地方に比すれば人体に対する適度において優れ、熱帯地方は生活資料に於いて他の帯（寒帯帯）に卓越すれども人体に対しての適度に於いて温帯に比して劣れ」と。

第26章「有生物」 植物に関しては、後者の第20章「植物」の第1節「植物の実用上要関係」、第2節「栽培植物と人生及地」、第3節「森林と人生及地」、第7節「陸生植物の分布」を参照している。なお後者の第4節「海藻類」に関する部分の記述がないのは、興味深い。海洋国ではない編者にはあまり関心がなかったのであろう。

動物に関しては、後者の第21章「動物」の第1節「動物と人生」、第2節「乳類と人生及地」、第3節「鳥類と人生」、第4節「魚類と人生及地」、第5節「軟体類及び棘皮類と人生及地」を参照している。

第27章「無生物」 後者の第17章「無生物」の第1節「無生物と物質的、人生」、第2節「無生物と精神的、人生」、第3節「無生物と文明」、第4節「岩石種類及び生成」、第5節「鉱物産出状態」、第6節「有用鉱物の分布」を参照しているが、特に金銀銅鉛および石炭や石油の分布を世界的に紹介している点に特色がある。

第28章「人口」 後者の第22章「人類」の第6節「人類の数量的分布」
と挿版の「世界人口経密」を参照しているが、具体的な数量については何か他の資料を参考にしている。

第29章「人種」： 後者の第22章「人類」の第3節「人類及び分布」、第5節「各人種之優劣與其将来」を参照している。

第30章「性情」： 後者の第22章「人類」の第4節「人類之階級與其分布」を参照しているが、第6章「島嶼」の第2節「島之種類與人生」、第10章「平原」の第1節「平原與人生」、第3節「高原與人生」等も参考にしながら人民の性質に言及している。

第31章「社会」： 後者の第23章「社会」の第1節「何謂社会」を参照しているが、編者は「野蛮社會」、「族制社會」、「軍国社會」に分けて言及している。ここにおいても何か他の資料を参考にしていると思われる。

第32章「言語」： 本章の内容は、後者の内容とあまり関係がない。言語を「独音類」、「連音不変類」、「変音類」に分け、さらに言語の発達と国勢の関係にまで言及している。

第33章「文字」： 本章の内容は、後者の内容とあまり関係がない。文字の起こりから始まり、中国文字、インド文字、ラテン文字への発展過程および文字の難易さと人民の進化にまで言及している。

第34章「宗教」： 後者の第24章「社会之分業生活地論」の第3節「宗教及其他」、第5節「道德教育及其他」を参照しているが、編者は「教育の目的は道德を重視するところにあり、また宗教の目的も道德の重視で、理においては同じである」と述べ、6頁半にわたって仏教、パラモン教、回教、ユダヤ教、キリスト教を詳細に言及しており、極めて重視していることが分かれる。

第35章「国家」： 後者の第28章「国家地論」の第3節「国家之種類」を参照しているが、本章の内容の大半は、他の資料を参考にしていると思われる。編者は、国家の領土や主権に関して、国際法との関係に言及している。
本章も4頁にわたっており、重要視の程度が分かる。

第36章「交通」：後者の第27章「産業地論下」の第1節「商業地理及び
原則如何」、第2節「交通機関之種類及要素」、第3節「交通機関之発達及其实
各種之長短」を参照しているが、鉄道輸送網、船舶輸送網については、中国
を中心としてかなり詳細に紹介している。本章も7頁にわたっており、その
重要度が分かる。

本書の「総論」にも記述されていたように、国民に対する地理の知識向上
に配慮がなされている。各章の項目について、まず言葉の定義をし、その上
で極力“五帯”、“五洲”における現状を紹介している。西洋列強の圧力を受
けている中国についても、言及した箇所が少なくなない。また欧州の地理歴史
に関する記述が豊富なので、「河南海事欧美預備学校」で使用されたという
ことが想像できる。

3-2. 「浙江潮」『江蘇師範講義・地理』との関係

(1)「浙江潮」との関係

本書の18章「海」の中の“ペテニュアの通商は欧州商業者の祖となった”、
“アテネは全ギリシャの中で最強となり、また海の故にギリシャの栄光時代
の覇者にもなった”は、「浙江潮」の「地人学」の“ペテニュアは海に頼り、
その通商貿易は地中海を巻き込んだ”、“アテネは海の故に、小国ではあるが
ギリシャ文化を牛耳った”に類似している。このような話題は、『最新人生
地理学』には記述がない。

本書の26章「有生物」の中で“地球の初めは空気の圧力が著しく大きく、
樹木をその圧力に遭遇し、次第に地底に埋没し、長い年月の後に石炭（石
炭）となっ”、“人々が言う所の石炭と鉄の二種類は、文明競争の利器であ
る”は、「浙江潮」の「植物与人生之関係」（続）の“太古の森林は大気の圧
力に違い、年久しくして、地底深く埋没し石炭の原形となる”、“人々が誇る
十九世紀の文明の利器は鉄と石炭である”に類似している。このような話題
も『最新人生地理学』には記述がない。

②『江蘇師範講義・地理』との関係

本書の総論の中に、「古より地理を読る者は、ただ幾つかの地名や言葉を
覚え、あるいは古書を参考にし、その歴史を考証し、その現状を推測するだ
けで、これはただその表面の現象を考証するだけで、その中の真実の原理が
分かってない。従って、その原理を深く理解したといならば、地理と人生の
関係を必ず理解しなければならず、その上多少なりとも発見があったなら、
過去の観点に決して拘泥してはならず、空論を交わしたり、実用を求めない
ことがあってはならない」という部分があるが、この部分は『江蘇師範講
義・地理』の総論の中の次の部分に極めて類似する。

単に地理学を研究する者が、ただ古籍を調べ、地名の沿革を少し知るに
すぎない。（略）その論述が一切であって、採用することができる所は少し
はあったとしても、しかし地と人の相関の理が発見されていないのは、考証
のための地理学である。それは今日の所謂地理学者とは異なる。今日の所謂
地理学は、実用の一種の科学である」と。

また本書の総論の中の「今日世界の所謂民族帝観主は、その目的はどこ
にあるのか。それは勢力範囲の拡張にほかならない。勢力範囲を拡充出来る
か否かは、その鍵は世界観念があるかないかである。世界観念があるかいない
かの鍵は、豊かな地理知識があるかないかである」との発想は、『江蘇師範
講義・地理』の総論の中の「個人と世界の関係は、かくの如く重要なので、
世界に対する自己の位置を注意しなければならない」に起因するように思わ
れる。

以上のように本書の総論の中には『江蘇師範講義・地理』の総論の痕跡を
見出することができる。

4. むすびに

本稿の考察を通して、以下の三点を提示してむすびとしたい。
まず第一点であるが、編者の凌廷輝は本書出版に当り、「浙江潮」、「江蘇師範講義・地理」、『最新人生地理学』を参照していたと言うことである。浙江同鄉会の会員として活動していたことから、同郷会が発刊した「浙江潮」を読む機会は十分あったと思われるし、また弘文学院出身者であることから、弘文学院出身でかつ倉の省出身である江蘇師範生の編集した「江蘇師範講義・地理」出版の情報入手および実際の書籍入手も比較的容易であったと思われる。『最新人生地理学』に関しては、発行所が上海の「群益書房」であることから、比較的入手が容易であったことが想像できる。凌廷輝は1903年以降、「人生地理学」に対し注目し続けていたのではなかろうか。

第二点目は、編者の凌廷輝は自身の問題意識に基づいて、「人生地理学」を再度構築したと言うことである。本書の「総論」には執筆の目的が幾つか記述されているが、中国を強国にするための国民に対する「啓蒙書」という趣旨が強く表れている。その重要な基礎を提供したのは『最新人生地理学』であると言っても過言ではないと思われる。

第三点目は、当時の留学生や知識人が、牧口著『人生地理学』の全訳本『最新人生地理学』に対して、どのような態度で接していたのかの一つの例を示したと言うことである。本書では前述の如く「中国を強国にするための国民に対する「啓蒙書」」といった態度が見られる。その後中国では、多くの「人生地理学」書が出版されたことが分かっている。これらと『最新人生地理学』との関係を考察する際に、本書は貴重な「橋渡し」の役割を果たすものとも思われる。本書は『最新人生地理学』を基礎として執筆された第 1
号の“人生地理学”書として重要である。以後出版される“人生地理学”書への影響が興味深いところである。

（注）
（1）凌廷輝編『人生地理学』新学会社、1909年
（2）張杉『從浙江看中國教育近代化』広東教育出版社、1996年、167－169頁。
　呂順力『清末浙江与日本』上海古籍出版社、2001年、133－136頁。
（3）呂順力『清末浙江与日本』前掲、118頁。
（4）張杉『從浙江看中國教育近代化』前掲、177頁。
（5）鄭振環『晚清西方地理學在中国』上海古籍出版社、2000年、190－191頁。
（6）凌廷輝編『人生地理学』前掲、1－3頁。
（7）凌廷輝編『人生地理学』前掲、18頁。
（8）凌廷輝編『人生地理学』前掲、29頁。
（9）凌廷輝編『人生地理学』前掲、35頁。
（10）凌廷輝編『人生地理学』前掲、36頁。
（11）凌廷輝編『人生地理学』前掲、41頁。
（12）凌廷輝編『人生地理学』前掲、42頁。
（13）凌廷輝編『人生地理学』前掲、48頁。
（14）世界語言文字研究会編集部『最新人生地理学』遊藝社、1907年、168頁
（15）凌廷輝編『人生地理学』前掲、67頁。
（16）凌廷輝編『人生地理学』前掲、38頁。
（17）壯夫『地人学』『浙江潮』第10期、浙江同鄉會雑誌部、1903年12月8日、22頁。
（18）凌廷輝編『人生地理学』前掲、50頁。
（19）黃孫『植物與人性之關係』『浙江潮』第10期、前掲、12頁。
（20）凌廷輝編『人生地理学』前掲、1頁。
（21）江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』江蘇專屬学務処、江蘇蘇屬学務処、1906
　　年、1頁。
（22）凌廷輝編『人生地理学』前掲、2－3頁。
（23）江蘇師範生『江蘇師範講義・地理』前掲、3頁。